
ドラゴンクエストⅤ～友と絆と男と女(外伝)

あちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエストV～友と絆と男と女（外伝）

【Nコード】

N0510X

【作者名】

あちゃ

【あらすじ】

ドラゴンクエストV～友と絆と男と女の外伝です。

本編で描写されなかった部分です。

男の幸せ？（前書き）

ドラゴンクエストV 友と絆と男と女の結婚イベント、リユカS I
DEです。

この時リユカは、こんな事を考えてました。

男の幸せ？

<サラボナ>

俺はビアンカと共にサラボナへ帰り着いた。

本来ならばリング入手を手伝ってくれたビアンカを、山奥の村へ送り届けるのが筋ではあるのだが…

別れたくない俺はビアンカの手を握り、ルドマンさんの元へ赴こうとしている。

花婿候補が別の女と手を取り返ってきたらどう思っかな？

怒るかな？

娘はやれん！とか言っかな？

そうなったら盾だけ貰ってビアンカと帰ろ！

<サラボナ・ルドマン邸>

「あゝ…遅くなりました、水のリングです」

「おお！リュカ！待っていたよ。どれ、水のリングも預かるうか」

俺は左手で左腰にある袋からリングをぎこちなく取り出す。

その間、ビアンカの手を握ったまま。

だが、このおっさんはリングしか見てない。

おい！！見てみる！ラブラブだろ！気にしろよ！

「あ、あの…リュカ！…そちらの…方は…」

ルドマンさんは気付かなかったが、フローラが気付いてくれた。

「ああ、彼女は僕の「私はビアンカ！リュカとはただの幼馴染みよ！」」

慌てて手を振り解き、力強く幼馴染みを主張する…

「じゃ、じゃあ、私はこの辺で帰るわね！」

ピアノカは帰ろうと、踵を返すが…

「ちよつと待ちなさいよ！」

扉から、ものつそいケバい格好の女性が入ってきた。

俺は格好はともかく、そのでかい胸に視線が行く。

フレアさん以上だ！

「リュカ…って言ったけ？あんだ凄いわね！本当にリングを2つ手に入れるなんて」

俺の視線に気付いた女性が、偉そうな態度で語りかける。

「はあ、どうも…あの…どちら様？」

「姉のデボラ姉さんです」

姉えええ！？

これ絶対、血繋がってないだろ！

「そう言う事！だから、私と結婚しても盾は手に入るわ。そうよね、パパ」

あゝ！？どういうこと？

「あ、ああ…まあ…そうだが…急に何を言「つまり、私と結婚しなさいって事！」

わお！俺モテモテ！

「いきなり何だ！リュカがお前と結婚する訳ないだろ！」

いやいや！そのオツパイは魅力ですよ！

「分かってないわねパパ。リュカは天空の盾を手に入れたいのよ。だったら、私の様な絶世の美女を選ぶでしょ！」

すげー自信だな、オイ！

だいたい、俺はピアノカが好きなんだ！

セフレにならしてやるけど…

「あの…ちよつ「今回の試練は私の婚約者を決める試練です！」
フローラに発言を阻めました。

俺、挨拶以外碌に言葉を発してないんですけど…

「それが？」

「それに参加したリュカは私と結婚するつもりなんです！」

違う！騙されて参加したんだ！盾くれるって言うから…

「見なさい、リュカの連れている女を！」

ビアンカが？

「フローラ。貴女は可愛いわ。お淑やかだし清楚で可憐よ。でも、リュカの好みはスタイルの良い美女よ！」

イヤイヤ！スタイルだけで選びませんよ！

「僕の話聞いてそう言う訳よりユカ！私と結婚するのなら、そんな田舎娘とは金輪際逢わないでもらうわよ！」

また、阻まれた！

「田舎娘って私の事！？」

「他にいないでしょ。さっさと帰りなさいよ！何時までも彼女面して居座らないで頂戴！」

「そうです！貴女がいなければ話がややこしくならなかったのに」

「な！？話をややこしくしたのは貴女のお姉さんでしょ！私は帰るつもりだったの！」

ビアンカが怒った！早く收拾を付けないと！

「ちょ、みんな僕の話し「静まらんか！」

思いの外でかい声ですね、ルドマンさん。

「みんなの気持ちはよく分かった！だが、リュカは一人しかない。だからここは、リュカに決めてもらおうじゃないか」

やっと俺に発言の機会が巡ってきた。

「あの、僕は「つまり今夜一晩ゆっくり考えて、明日の朝に結論を出してもらう。リュカは宿屋に泊まりなさい。部屋を用意しておこう。ビアンカさんは我が家のゲストハウスに泊まるといい。遠慮はいらんよ」

阻まれた！

更に一晩待てってさ！

俺もう決めてるんだけどお！

どうして俺の話聞かないの！？

<サラボナ>

食事を済ませ一息入れたところで、デボラに会いに行く。

もしかしたら、かなりの女で心移りするかもしれないから…ではなく、真意を聞き出したい。

だってあり得ないもの！

いきなり現れて『私と結婚しろ！』って！

相当な馬鹿じゃ無ければ裏があるね！

もし、本当に俺に惚れているのなら、一晩お試ししちゃってもいいしね！

<サラボナ・ルドマン邸>

広大なルドマン邸の三階部分の6割を占有しているデボラの私室。

どうやら我が儘いっぱいに育ったらしく、結婚したら手を焼きそうだ…

デボラは胸を強調させた色っぽいナイトドレスに身を包み、俺の来訪を歓迎してくれた。

これは罠なのかな？手え出したらアウト？

我慢しないと不味いよね！？

「見た目良い女だなあ…（ぼそ）」

「あゝ！？今、何だった！コラ！！」

ヤバイ！口に出してた！

「見た目だけじゃ無いわよ！アンタ私の事を何も知らないでしょう！勝手な事を言うんじゃないわよ！！」

凄いい勢いで怒鳴りまくるデボラ…

口を挟む事が出来ない…

・

・
・
「……………ともかく！アンタはフローラの事を愛してないでしょ。そんな男と結婚したら私の可愛い妹が不幸になるのよ！だからアンタは私と結婚しなさい！命令よ！」

「あはははは…勝手だなあ…」

「な、何よ！」

「僕には僕の人生がある。だから僕は自分の意志で物事を決めるよ。命令は受けない」

「じゃあ…一晩、じっくりと考える事ね！どの女を選ぶか…」

我が儘に育ったけど、馬鹿女では無い様だ。

俺はデボラの部屋を後にして、フローラへ会いに行く。

（コンコン）

2階の一角にあるフローラの部屋のドアをノックする。

「フローラ？入るよ？」

返事は無かったが鍵が開いていた為、ノックの勢いでドアが開いてしまった。

室内に入ると薄明かりの中ベッドに横たわる人影が一つ…

近付き話しかける。

「あれえ？寝てるのぉぉぉ！すげー格好だな！オッパイ丸見えじゃん！」

何この姉妹！

やり口があざといよ！！

頑張れ俺！負けるな俺！！

「話をしようと思ったけど…」

バレバレの狸寝入りですね。（クス）

（スツ）

俺はフローラに布団をかけ、下半身の暴れん坊將軍を理性で押さえ付け、寝た芝居をするフローラに対し、紳士的な芝居で対抗する。

「風邪引くよ…」
そして後ろ髪が引かれまくる中、フローラの部屋を後にする。
(ボタン)

<サラボナ・ルドマン邸・ゲストハウス前>

もう、俺の頭にはビアンカの裸しか無い！

どうせ明日告るんだから、今すぐ告って前祝いしてもいいよね！

「リュカ！こんな遅くにどうしたの！？」

不意に上から声をかけられた。

見上げるとビアンカがテラスから身を乗り出し話しかけてくる。

「ビアン「何かごめんね！私をもっと早く帰っていればよかったのに。」」

俺の言葉を遮るビアンカ…口説かせない気が！？

「ま、デボラさんも混乱の一翼ね！」

「あ、ああ…」

「リュカはフローラさんと結婚して幸せになるべきよ。」

「幸せ…に…」

俺の幸せはビアンカと共にある！

「天空の盾を手に入れて、パパスおじさまの遺志を継がないと…」

父さんもきつと、俺の幸せを優先してくれる…はず…

「父さんの…気持ち…」

「いい！もうリュカは不幸を背負い込む必要無いんだから…幸せに…ならなきゃ…」

まいったな…また、ビアンカを泣かせてしまった…

「幸せ…か…」

「そうよ！貴方のお姉さんとして…貴方が心配よ…」

………お姉さん！？ふざけやがって…そんな軽い気持ちじゃ無い事を明日分かせてやる！

「ビアンカは何時もお姉さんぶるね。」

俺は萎えてしまった暴れん坊將軍と共に、ビアンカの前から立ち去る事に決めた。

沸々とルドマンへの怒りが湧いてくる。

ビアンカを泣かせる原因を作り出した、あのおっさんへの怒りが…

<サラボナ・ルドマン邸>

あゝあ…結局昨晚は一発も出来なかったな…

今もメイドさんをナンパしたら怒られたし…

あゝ！ルドマン、ム力つく！

(コンコン)

俺の事を叱ったメイドさんに案内され、みんなの居る応接室へ入室した。

「リュカ…良く眠れなかったかな？」

「え？バツチリ爆睡です！どうしました？」

「いや…表情が暗かったのでは…」

お前のせいだ！

「ああ！いや…そこでメイドさんをナンパしたら怒られまして…」
「婚約者がいるのにふしだらです。』って…結婚したらナンパしちゃダメ？」

別にまだ独身なんだからいいじゃん！

「で！三人の内誰と結婚するか決めたのかね！？」

何か口調がきつい…

「あれ？イラついてる！？(クス)…冗談ですよ…」

何でお前がイラついてんの？

頭にきてんのは俺だよ！

「いい加減にしたまえ！昨晚の大騒ぎは君も知っているだろう！真

面目にやりたまえ！」

お前が言っな！

「大騒ぎの原因を作ったのは貴方でしょう…僕にイラつかれても困ります。」

もう今日は言いたい事を言わせてもらうかね！！

「で、では、誰とけっこ…その前に！」

その前に言わせる！

「その前に、僕はルドマンさん！貴方に言いたい事が…文句があります。それを言い終わらない内は、事態を進めるつもりはありません！」

「何かね」

「まず最初に、この事態の原因になったフローラの結婚相手を決める試練の事です。」

何で俺が巻き込まれなければならないんだ！

「貴方が築き上げた財産や資産を譲渡するのは貴方の自由だ。だが、フローラの人生を自由にしたい訳無いでしょう！」

金持ってるからって何でも自由になると思うのは間違いだ。

「今回：結果的に大事には至らなかったが、もし財産目当ての腕っ節馬鹿が合格していたらどうするつもりでした！？」

「だが…この物騒なご時世、フローラを守るには力がある！だから「馬鹿ですか！あんたは！」

それじゃあ婿捜しじゃなく、ボディガード探しじゃん！

「物騒な世の中からフローラを守るのなら、金を使って武装すればいいだろ！一人の物理的な力なんてたかが知れてる。盗賊が1000人で攻めてきたら何も出来やしない。」

一人に期待しすぎなんだよ、馬鹿！

「むしろ、そんな腕っ節馬鹿はフローラを不幸にする！」

ルドマンさんの表情が驚きへと変化した。

コイツ結婚後の事を何も考えてねえーな！

「多額の泡銭が入り、あっちこっちで金を散撒き女をつくる！フロ

「ラの事を顧みてない男は、その事を指摘されると腕っ節に物を言わせるでしょう！」

俺を含め、男なんて勝手な生き物なんだ！

自分を見ればよく分かるだろうが！

「もう一件、言いたい事が…これは、この場にいるみんなに言いたい！」

みんな自分の事ばっか…

「昨日、僕の話有谁も聞こうとはしなかった！何度自分の気持ちを言おうとして遮られた事か！挙げ句、一晚悩んで持ち越せて…」
言い終え我慢出来なくなり、俺はビアンカへキスをする！

俺の暴れん坊將軍は押し倒せと命令するが、さすがにそれは我慢した。

「ちょ、リュカ！何！？」

驚くビアンカ…

もう反論は許さない！

「ビアンカ！好きだ！愛してる！」

「何言ってるの！私なんかを選んだら天空の盾が「あんな物いらない！ビアンカがいい！」

「あんな物って…パパとおじさまの遺志は！」

「父さんを侮辱するのはやめてくれ！」

「ぶ、侮辱って…」

「父さんは偉大で優しい人だ！僕の幸せを思ってくれる人だ！」

父さんなら俺の幸せを一番に考えてくれる人だ…多分…きっと…

「それに天空の剣があれば、勇者を捜せる。勇者を見つけてから盾を貰いに来ればいいし…」

「リュカ…そんな…私…」

「後はビアンカの気持ち次第だ。もし僕の事が嫌いだったら…諦める…誰とも結婚しない…」

独身の方が気楽だね。

「私（ヒック）も…リュカ（ヒック）リュカの事が（ヒック）」

大好き…」

うつ！やっぱりビアンカに泣かれると戸惑うな…

「リユカじゃなきゃヤダ！私…私…」

OKって事だよな！

俺は腕の中で泣きじゃくるビアンカを見つめながら思う、独身捨てるのちよつと惜しいなと…

「私を選ばないなんていい度胸ね！」

同じように泣きじゃくるフローラを抱き締め、デボラが嬉しそうに話しかける。

「（クスツ）…そうですね…妹思いの巨乳美女は捨てがたかったです…（クスクス…）」

「フローラを馬鹿男共から守ってくれてありがとう。」

見た目とは裏腹に、優しい女性だな…

「ビアンカを救ってくれたからチャラです。」

ま、デボラにとってはビアンカは偶然救われたのだろうけど…

フローラとビアンカが一通り泣き止むのを待ってから切りだした。

「では、僕はそろそろ行きます。」

これ以上ここに居たら、何に巻き込まれるか分かったもんじゃない！

「待て！私は結婚式の準備をしまっているのだ！これを無駄にする事は許さん！」

知るか、そんな事！

「ふう…つくづく勝手な人ですねえ…貴方は…」

お前が勝手に準備したただけだろが！！

「何とでも言う方がいい！私はリユカ…お前が気に入った！私の好意を受け取ってもらおうぞ！」

「好意の押し売りです。それは…」

うゝん…結婚式って金かかるよね…

人の財布で挙げられるのは美味しいなあ…

腕の中のビアンカを見る…泣き腫らした顔だが美人だ…

「そんな訳で2日後には式を執り行う。」

「ちょ、OKって言っていないし！」

「2日！？はえーよ！準備は…」

「準備は殆ど出来ている！お前はほっておくと浮気をしそうだからな！サツサと結婚させておくしかないだろ！」

「そ、そんな事は…（ゴニョゴニョ）」

「うっ！痛いところを…」

「それとリュカにはやってもらいたい事がある。」

「やば！また、面倒事か？」

「何ッスか？娘さん二人の今晚のお相手？」

「コロスぞ！…そうじゃない！お前のルーラで招待客へ招待状を渡し、連れてきてほしいのだ！」

「何で主役の一人がパシらなければいけないの？」

「えーめんどくせー」

「コラ！リュカ！貴方にしか出来ないんでしょ！」

「ビアンカに怒られました…」

「…はゝい…その間ビアンカは？」

「ドレス合わせの為残ってもらっ」

「仕方ないか…ビアンカの為に盛大な式にしたいしね！」

男の幸せ？

<ラインハット城>

ルーラでラインハットまでやって来た。
ヘンリー驚くだろうなあ。

先ずはデール君に報告。

「元気してた？デール君」

「はい。おかげさまで…ところで、お一人ですか？珍しいですね？」

「うん。今度、絶世の美女と結婚する事になったんだ！」

「ご結婚なさるんですか！おめでとうございます！」

「うん。2日後だけだね」

「2日！？い…いきなりで、いきなりですね…」

言いたい事は分かるが、酷い台詞だ。

「あ！待っていて下さい！今、兄さんを…ヘンリー兄王を呼んできます！」

澄ました面してヘンリーが下りてきた。

「やあ、ヘンリー。まだマリアさんは愛想を尽かしてない？」

「あのなあ…まったく…お前こそどうなんだ？ピエール達に嫌われたん…じゃ？」

俺が一人で居るって、そんなに珍しいかな？

「おい！ピエール達はどうした！？本当に…」

「そんな訳ないだろ。他のみんなはサラボナで人質になっている」

「人質！？どういう事だ！」

「うーん…僕が逃げ出さない様に…かな？」

説明がめんどくせーからこれ読め！

「これ…読めば分かるから」

結婚式の招待状に目を通すヘンリー。

「お前、結婚すんのか!？」

・
・
・

式まで時間が無い事を伝え、参列者を募る。

「何でこんなギリギリで招待状を配ってるんだよ!」

「しょうがないじゃん!プロポーズしたのついさっきなんだから!」

「じゃあ、それに合わせた結婚式のプランを立てるよ!」

「だって、早く結婚式を挙げないと浮気するだろ!って言われたんだもん!」

「ルドマンさんは賢いなあ...」

納得しちゃったよ、この人!

ム力つかない!?!ム力つくよね、これ!?

皆に声をかけ参列を確認するヘンリー...

ヘンリー、マリアさん、ヨシユアさん、マリソル、デルコ、この5人が参列する事に決まった。

マリソルなんかは泣きながら「私がリュカさんと結婚したかったのに...」と、可愛い事を言ってくれる。

でも、もう勘弁して欲しい...

あの騒動は二度と経験したく無い!

「リュカさん、このままサラボナへ行くのですか?」

「いえ、マリアさん。次は海辺の修道院へ行きます」

第二の人生の出発点だしね...

<海辺の修道院>

何か、ここに来るのも久しぶりだな。

修道長に結婚を報告する。

「まあ、おめでとございます。リュカもとうとうご結婚されるのですね」

「はい。つきましては、お世話になったシスター方にご参列頂こうと思ひまして、お迎えに上がりました」

「シスター・アンジェラ。貴女がご出席してあげなさい」

「修道長様は？」

「私はここでリュカの為に祈りを捧げたいと思います。リュカ、シスター・アンジェラを連れて行つて頂いてもよろしいですか？」
むしろ、ババアが来るより嬉しいね。

「はい」

「では支度をして参ります。少々お待ち下さい」

アンジェラさん美人だよなぁ…

「アンジェラさん！荷物そんなに必要ないですから。殆どサラボナでルドマンさんが用意してくれます。着替えを1・2枚で大丈夫ですよ。何なら裸でもいいし…いや、むしろ裸の方が…」

ゲシ！

「お前は…結婚すんだろ！」

「関係ないだろ！結婚したって、嫁がいたって、女の裸は見たいだろ！」

良い子ぶってんじゃねぇーよ！

「リュカさん！私なら何時でも見ていいですよ！」

だからマリソル好き！

「マリソル…期待…しちゃうよ、僕…」

ポカ！

ポカ！

「「いたーい」」

「お前らは…」

「ふふっ…アナタは弟妹が沢山いますね」

「まったく…手のかかる…」

<サンタローズ>

相変わらずでかいオツパイを揺らしながら俺の報告に驚くフレアさん。

「リユー君、結婚するの!？」

「はい。アルカパに住んでいたビアンカと……」

結婚の報告に来たのにキスされた!

ちよつと結婚の意思が揺らぐね。

「こんなに愛している私を捨てるの!？」

「捨てないよ。結婚はするけど捨てないよ」

ちよくちよく遊びに来よ!

ビアンカにばれない様にしないとね!

(ゲシ!)

ヘンリーに蹴られる!

「そんな訳いかねえーだろ!」

「あいた!」

「ちよつと!ヘンリー様!リユー君に乱暴しないで!」

「そうよ!ヘンリー様!」

「うっ!マリソルまで……」

ヤバイじゃん!俺、モテモテじゃん!

やっぱ結婚すんの勿体ねえーな!

「じゃあ……それでいい!リユー君の事お祝いするね。でも、サラボナへ行ったら悔しいからビアンカちゃんをいぢめる」

「(クス)……ビアンカは強いよ。かなりの修羅場潜り抜けたから結構バラ色の人生だね!

<山奥の村>

あゝ…やっべ…緊張してきたかもしれない！

よく考えたら、ここに一番に来なきゃダメだろ！？

っ！か全てにおいて順序間違ってるよね！

『娘さんを僕にください！』って言う前に結婚式の招待状を渡す…
今更断られたらどうすんの？

『お前にビアンカはやらん！』って言われたらどうしよう…
参列客を引き連れて来る所じゃないよね！？

ダンカンさんが優しそうに微笑んでいる。

「おや？リュカ…どうしたんだい？こんな大人数で…ビアンカの姿が見えないが…いったい…？」

「ビアンカはサラボナで結婚式の準備をしています。お義父さん」

「…？お義父さん？…リュカ…お前はサラボナのフローラさんと結婚する為に、危険な試練を受けたのではないのかね！？」

「何！どういう事だ！詳しく聞かせろ、リュカ！」

俺とダンカンさんの会話に割り込むヘンリー。

あー、うるっせーなコイツ！

今、それどころじゃねえーだろ！

・
・
・

大分端折ったが、大まかには説明出来たね。

驚いてはいるが、納得はしてもらえたはず…

「…リュカよ！父親としては嬉しい限りだが…ビアンカと結婚しては、天空の盾が手に入らないのでは？」

アンタもそう言う事言うか！

「いりません！あんな物！どうせ装備出来ませんし！」

「しかし…パパスの…」

いいんだよ！あんなもん！！

「僕はこの世界の何よりもビアンカが好きなんです。ビアンカと結婚して後悔はありませんし、これからもしません」

アンタが『娘はやらん!』と言つても結婚するから!

「リユカ…お前に話しておく事があるんだ…」

何だあゝ、そんなに俺に娘をやりたくないのか!?

「もしかして、ビアンカとは血の繋がった本当の親子じゃないんですうゝとか言う?」

「…!!知っていたのか!?!」

……嘘だろ!オイ!正解しちゃったよ!

言う!?!今ここで、そう言う事言う!?!

「え!?!…ええ…まあ…」

何て答えればいいんだ…

「そうか…知っていたか…ビアンカは私とアマンダの「どうでもいいです!」

「おい!リユカ!どうでもいいはないだろ!」

もうムリ!これ以上難しい話はしないで!

キャパシティーオーバーです!

もうどうでも良いです!

俺はただ、ビアンカとエッチしたいだけですから!

「僕とビアンカが実は血の繋がった姉弟だったら重要な事だけど、この場合はどうでもいいです」

血が繋がっていたらヤバいけどね!

「僕が愛しているビアンカという女性は、ダンカンさんとアマンダさんに育てられた素敵な女性です。そしてビアンカがダンカンさんをお父さんと呼ぶ限り、僕にとって貴方はお義父さんです。これからも娘夫婦を暖かく見守って下さい。よろしくおねがいします」

ともかく、そう言う事で納得しろ!

もうこれ以上話をめんどくさくするな!

また、あの花嫁選ぴを再開したくないから!

<サラボナ・ルドマン邸>

2日ばかりで参列客を連れ帰り、ルドマンさんに報告をすると、
「リュカ、戻ってきて早々悪いのだが、もう一つ用事を頼みたい」
何だよこのおっさん！

結婚式費用を負担するからって、調子こいてんじゃねーぞ！

「何ツスカ？」

「うむ、実はな……ここから北に行った所に山奥の村があつてな、
この職人に花嫁用のシルクのヴェールを注文してるのだよ。それを
受け取って来てくれ。お前の花嫁の為に注文した物なんだから……」

（怒）今さっき、そこから帰って来たんだ！！

「分かりました！！行つてきますよ！！」

俺はビアンカに会いたい衝動を抑え、再び山奥の村へと飛んで行く。

「んだよ！あのハゲ！先に言えよ！二度手間じゃねえーかよ！」

<山奥の村>

村に着き、件の職人を探す。

村人に聞くと、村の入口付近の洞窟で商いをしているのが、その職
人だそうです。

「あのお……シルクのベールを受け取りに来たんですけどお……」
中にはおっさんが一人。

「おう！良く来たな。既に出来上がっているぞ！」
何か馴れ馴れしいおっさんだ。

…………… 何処かで会った事がある様な……………

「あれ？クライバーさん！？もしかしてサントローズで薬師をして
いたクライバーさんですか！？」

「何だ？俺の事を知っているのか？」

やっぱりそうだ！

「僕です！パパスの息子、リュカです！」

「なんと！？無事だったのかリュカ！良かった！本当に良かった！」

「クライバーさんも、よくご無事で」

「うむ…ちょうどラインハットが攻め込んできた時に、サンタローズから離れておってな…俺だけが助かってしまったのだよ…」

……………そうか、ご家族はもう…

「で、お前さんはどうしていたのだ、今まで？」

俺はこれまでの事をクライバーさんに告げた。

・
・
・

「そうか…パパスは死んだか…お前も苦勞をしたのだな…」

「クライバーさん、大丈夫ですよ。僕は今、幸せ絶頂期ですから」

「お！？そうか、シルクのベールを必要としているという事は結婚するのか！」

「そうです。クライバーさんは覚えていますか？アルカパに住んでいたビアンカを…」

「覚えてる、可愛い女の子だった。あの娘の為に前は一人で洞窟へ入って行ったけな！」

「そうです。ちなみにアルカパからこの村に移り住んでいた事はご存じですか？」

「何！？何時からだ！？」

「もう、7・8年前と聞きましたが…」

「気付かなかったの？マジで！？」
「3年もこの村にいて気付かなかった！この村の何処に住んでいたんだ？」

「一番奥の家にです」

「それじゃあ、あの美人さんがビアンカちゃんか！！この村の若い

男は…イヤ、若くない男も、みんな狙っていたのだぞ！上手い事やりやがって！」

「あはははは！」

俺は嬉しい再開に思わず時間を費やしてしまった。

・
・
・

「………おっと！これ以上引き留めては申し訳ないな！ほら、これがシルクのベールだ。ビアンカちゃんにお似合いだろうって」

「ありがとうございます」

俺はシルクのベールを受け取り、クライバーさんの元を後にする。

<サラボナ・ルドマン邸>

「ただいま！」

俺はビアンカが待機している部屋へ入る。

そこにはフローラやフレアさんがビアンカと楽しげに会話をしていた。

「おわ！ものっそいキレイじゃん、ビアンカ！」

侮ってました。

ビアンカすっげ〜キレイ！

ヤバイ、ヤバイです！押し倒したいです！！

「もう結婚式なんかより初夜迎えたいんだけどベツト行かない？」

「何子供の前で馬鹿言ってるんだ！」

うっさいのお〜コイツは！

「いた〜い。何すんの…主役よ！？今日、僕は主役なんですよ！」

「じゃあ、真面目にやれ。」

出来るか！

こんな美女を目の前にして！

「みんなが居たから恥ずかしくって戯けたんじゃないかあ」

「みんなが居なかったら押し倒しているだろうが…」

さすがヘンリー…俺の事を分かってる！

「てへ」

男の幸せ？（後書き）

次回、結婚披露宴です。
お楽しみに。

男の幸せ？

<サラボナ・ルドマン邸・披露宴会場>

結婚式は滞りなく終了した。

参列客の幾人かは俺がやらかす事を期待していた様だが…期待を裏切ってやった!!

ザマミロ!!

俺の目の前ではヘンリーがエラソーに結婚について語っている。
相づちを打っているが聞き流す俺!

「……………って、聞いているのか、リュカ!!」
怒るヘンリー!

「聞いてませんでした。くどくどうるさいので」

「うるさいってお前…まあ、いい…そんな事よりも!お前にピアノ
カさんを幸せに出来るのか?」

よけーなお世話だ!

「うつさいなあ…」

「お前なあゝ重要な事だぞ!!」

「ヘンリーさん。大丈夫です!私はリュカを不幸にしても幸せにな
ってみせます!」

「ははは、なら安心だ」

何で安心なんだよ!

「そうです!!私の初恋の人を奪ったのですから、死んでも幸せにな
ってもらいます!」

ちよつと!?!誰だよフローラに酒飲ませたのは!?!?

「私だつて初恋です!」

マリソル!?!火に油を注がないでほしいのだが…

「何ですか!?!私なんかリュカのおかげで価値観が変わったんです
よ!」

大袈裟だよ！

「サラボナから離れる事に不安を持っていた私に、世界の素晴らしさを教えてくれたんです！」

「ちよつと何言つてんのこの娘！？」

「私なんか人生を救われたんです！！」

「マリソルさん！？酔っ払いを刺激しないで！！」

「リュカさんが居なかったら私も弟も餓死してました！リュカさんは私達の救世主です！」

「話がでかくなってきた……………」

「さっすがリュウ君！色んな人を救ってるのね！」

「今の俺を救う人は居ないのですか？」

「私も…レヌール城で救われたわ…」

「（クス）また懐かしい事を…」

「あの日、私の心は決まったの！リュカ以外の男性は好きにならないうって！」

俺にとつてレヌール城で一番記憶に残っている事と言えば、ソースまみれになった事だ！

「ソースまみれになった甲斐があつたかな？」

「うん！バッチリよ！」

「ヤバイ！ヤバイヤバイヤバイ！！！」

「可愛い！可愛い可愛い可愛い！！！」

「今すぐベツトインしたいですう！！」

「だからあげたのよ！」

「え！？何を？処女の事？」

「ちよつとリュカ！？憶えて無いの？アルカパで別れの間際にあげたじゃない！」

「え？何の事？アルカパで処女貰ったけ？」

「ち、違うわよ！！何でそう言う思考回路なの！！」

「じゃ何！？」

「パ、パンツ…よ…」

「パンツ？」

何？

「本当に憶えてないの！？リユカが欲しいって言ったのよ！」

「お前：そんな事言ったの？」

.....！！

「ああ！！言った！言った言った！確かに言った！」

「馬鹿なの？お前！」

呆れるヘンリー！

「いや：だって：本当にくれるとは思わなかったんだ」
もう亡くしちゃったから忘れてたよ。

すると突然、ワインボトルを片手にフローラが立ち上がり叫ぶ！

「私もパンツあげたんです！」

うん。皆さん啞然です。

「リユー君の初めての相手は私よ！」

人の悪い笑みを浮かべたフレアさんが、やはり立ち上がり叫ぶ！

この人、素面だよな！何でこんな事叫べるの！？

「うるさい！私だってリユカの事が好きなんだ！！」

まさかのピエールがふらつきながら叫ぶ！

知ってたけど、今叫ぶ！？

ピエールのテーブルの上には、空になった酒のボトルが俺の歳の数以上転がっている。

どんだけ飲んだんだ！？

洒落にならない空気になってきた：

ヘンリーに助けを求めようと視線を向ける。

手を左右に振り、『ムリ！』とジェスチャーで答える。

頼りになる親友だ！！（怒）

「でも結婚したのは私よ！」

ピアノカが手にしていたワインを一気に飲み干し高らかと叫ぶ！

ピアノカ姉さん！アナタまでそう言う事言っちゃうの？

俺も弾けちゃうよ！

「愛人募集中です」

ドサマギです。

もう、そう言う場にしましょう。

言いたい事を言いましょ。

「お前は……」

ヘンリー、ヨシユアさん、ルドマンさんが声を揃えて怒ろうとするが……

「はい！私、リュカさんの愛人になりまーす！」

マリソルの元気の良い発言に、言葉を失う。

もう、この後は大騒ぎです。

飲んで、歌って、叫んで、泣いて……

・
・
・

結婚して良かったと思います。

<サラボナ・ルドマン邸>

俺の目の前で、ビアンカが俺の手から何かを取ろうと藻掻いている。

「おはよう、ビアンカ……何してんの？」

「何って……パンツ返して」

どうやら俺が握り締めていたパンツが目当ての様だ。

「何で？」

「あのねえ……もう日が高い位置にあるのよ！リュカはみんなを送り届けないといけないでしょ！」

気にする事ないのに……

「いいよ、待たせておけば……それよりパンツ穿く前に！」

そう言っつてベットに押し倒す……第2ラウンド開始だ！

・

・
・
服を着たままも燃えるな！

<サラボナ>

一通り満足し（ビアンカはお疲れです）、町のカフェテラスへ赴くと参列客プラス旅の仲間達が、雁首揃えて昼食中だ。

「やあ、みんな！おはよう」

俺はヘンリーの隣へ座り、来たばかりの Pasta を勝手に食べる。

多分ヘンリーのだろう。空腹は最高の調味料だ。

「おはようじゃねえー！何時だと思ってんだ！もう昼過ぎてんだぞ！」

相変わらずうるさいのはヘンリーだ！

「まーまー、アナタ落ち着いて下さい」

さすがマリアさんは優しいなあ。ヘンリーには勿体ないなあ。

「リユー君。ビアンカちゃんは？」

「ビアンカならまだ寝てるよ」

Pasta を食べながら答える。

ところでこれ、うめえーな！

「お前昨晚ガンバリすぎなんだよ！」

新婚だぞ！頑張っちゃうに決まってるだろ！！

「いやいや…朝は起きてたんだ。でもさっき第2ラウンドになっちゃって…」

「お前…俺達待たせて、何やってんだよ！」

「うん。ナニやってた」

聞く方が間違ってると思いませんか？

公明正大にエッチ出来る仲ですよ！

足腰立たなくなるまで頑張るに決まってるじゃないですか！

「さて！じゃあ行きますか！」
ヘンリーのメシも食い終わったし、これ以上待たせたらヘンリー以外の人に悪いし、出発するとしましよう。

< 山奥の村 >

最初はダンカンさんを村まで送る。
村の入口で「私はここで良いから…他の皆さんを送ってあげなさい。」って…
さすがはお義父さん。いい人だ。

< ラインハット >

次はゴチャゴチャとうるさい男を送ってやる。
これでも一応王族だしね。
「俺達もここで良いよ」
城の入り口で軽く別れを切り出すヘンリー。
「お前の旅も大変なのは分かるが、ビアンカさんを大事にしろよ！」
「僕が女の子を大切にできなかった事があるか！？」
「そう言う意味じゃ…まあ、いい！じゃあ、気を付けて…」
珍しく歯切れが悪い？何だろう？お腹空いてるのかな？

< 海辺の修道院 >

シスター・アンジェラを修道院に送り届ける。
修道長と2・3話をし、別れを告げると寂しそうなシスター・アンジェラの顔が伺える…

「アンジェラさん。僕の愛人になりたくなったら何時でも言っ
て下さい！随時募集中ですから（笑）」
苦笑いではあったが、笑顔で別れる事が出来た。
今生の別れでは無いのだから、涙や寂しさは不要だ。

<サントローズ>

元実家裏の父の墓標。

遺体も遺品も無い石を組み合わせただけの墓。

もし父さんが生きていて、ビアンカと結婚すると告げたら、どんな
顔したのかな？

ビックリするかな？納得するかな？…反対はしないだろうな！

………両親が居ないって、こんなにも寂しい事なんだ…

イカン…悲しくなってきた…

ビアンカの元に帰って、心と暴れん坊將軍を慰めてもらおう…

俺は丘の上の教会へ向かいフレアさんに挨拶を告げる。

「じゃ、新妻を待たせると怖いので帰ります。」

すると、潤んだ瞳のフレアさんが抱き付きキスをしてきた。

い、今はマズイですから…

俺の暴れ坊將軍が命令を下す！

ゴー・アタック！

ゴー・アタック！

ゴー・アタック！

將軍閣下には逆らえませんでした。

男の幸せ？（後書き）

この時リユリユが装填されました。

哀れな男、心の闇、悲しい結末（前書き）

とても気分の滅入る話です。

先に謝っておきます。

ごめんなさい。

哀れな男、心の闇、悲しい結末

<ポートセルミ・酒場>

俺の名はジャイー。

故郷のアルカパから出て2年。

今は、このポートセルミの酒場で黒服として働いている。

黒服とは…要は踊り子達のボディガードだ！

酔っ払ったバカが踊り子にちょっかいを出したら、この鍛え上げられた肉体で駆逐する！

まあ…後は雑用を少々…

俺の場合雑用が多い。

俺に刃向かうバカは居ない！

そんな俺の目下のお気に入り、踊り子の『クラリス』だ！

整った容姿に、大きな胸、そして細いウエストは堪らない！

そのクラリスの出番も全て終わり店を出て行くこうとしている。

俺はクラリスに近付き話し掛け口説く。毎日の日課の様なものだ。

こう言った日々の積み重ねで女は心を許すんだ！

「よう、クラリス！今日も色っぽくて良かったぜ！…なあ、そろ

そろ俺と付き合えよ！お前も俺に惚れてんだろ！」

「ちよっと！冗談止めてよね！！何で私がアンタなんかと付き合いななきゃいけないの！？」

これがウワサのツンデレか？困ったもんだな…女って生き物は。

この後も口説き続けたが、

「いい加減にして馬鹿！！」

と、顔を赤くしてクラリスは逃げてしまった。

よほど恥ずかしかったんだろう…

顔…真っ赤だったぜ！素直になればいいのに…

少しばかりクラリスとおしゃべりがすぎた様で、仕事が溜まってしまった。

店長にどやされ、もう上がる時間にも拘わらず俺はステージにモツブをかけている。

すると酒場の奥で一人の田舎者を三人のならず者が囲みカツアゲをしている。

俺は今、時間外だ！面倒事に首を突っ込んでられない！

よく見るとならず者共は、最近ラインハットから流れてきた兵士をクビになった連中だ。

他のみんなも遠巻きに眺めている。

しかし、一人の旅人風の男が近付き不思議そうに眺めている。

ならず者のリーダー格が、男の視線に気が付き不機嫌な態度で男に詰め寄る。

「何見てんだ！？にいちちゃん！！」

ならず者が恫喝をするが、男は怯えた様子もなく答えた。

「いえ…変わったナンパだな」と思いました。あ！どーぞ…気にせず続けて下さい。邪魔しちゃ悪いから。」

「ぷーっ！！」

ツレの女が思わず吹き出したのを合図に、ならず者は怒りのまま剣を抜き放ち、男へ斬りかかる。

勝負は一瞬で着いた。

近距離から斬りかかったにも拘わらず、男は軽く去なし、ならず者リーダーを遠く離れた壁まで投げ放つ！

頭から壁に激突したリーダーを、手下二人が抱え逃げて行く…

フン！俺だってあのくらい出来るさ！

俺はああ言っスカしたヤツが嫌いだ！

初恋のビアンカと仲良くしていたのも、あんな紫のターバンを巻いたスカしたヤツだった！

同一人物か！？

イヤ、そんなはずない！

ヤツの故郷のサンタローズは滅ぼされたんだ…
一緒に鬺り殺されたに違いない！いい気味だ！

・
・
・

俺はさっさとモップがけを終わらせ、自室へと帰る。

自室と言っても、店が提供するボロアパートだ。家賃は給料からの天引。

店長のアホにゴチャゴチャ言われなければ、もっと早く帰れたのに…
あのアホ、いつかぶっ飛ばしてやる！

今日も夕方になり、俺は酒場へ仕事に出かける。

店長のアホが、遅刻だ何だと喚いている。

朝、時間以上働いてたんだから、遅れて来ても構わねえーだろーが
！！

相変わらずム力つくヤローだ！

取り敢えず詫びの言葉を吐いて仕事に取り掛かる。

ステージでは既にクラリスが踊っている。

本当に良い女だ！

絶対俺の物にしてやる…こんだけ毎日口説いてんだ。もう少しで落ちるはず！

そうしたら毎日犯してやる！

ステージで腰を振るか、俺の上で腰を振るかの毎日にしてやるぜ！
そんな事を考えていたら、先輩黒服の『ゴドラド』が俺の頭を小突いてきた。

「テメエー、何サボってんだ！今日、遅刻してんだからその分多目に働けボケエー！」

本当、この店はム力つくヤツらばかりだ！
いつかぶっ殺してやる！

その日俺は裏方の仕事を押し付けられた。
皿を洗ったり、倉庫から酒を運んだり…

そろそろクラリスが上がる時間だ！

俺は仕事を放り出し、クラリスを迎えに行く。

店内に入ると、クラリスはステージ衣装のまま、客とテーブル席で
会話をしている…朝のスカした男だ！

顔を近づけ楽しそうに会話をしていたが、立ち上がり二人して宿屋
へ向かって行った！

ふざけやがってあのヤロー！！

その女は俺の物だ！手え出してんじゃねえー！！

俺は男をぶっ飛ばしてやろうと思い、ヤツの元へ近付く……前に、
突然店長が現れて俺に怒鳴りだした。

「テメー今日は裏方だろが！何で店内でサボってんだ！ちよつと来
い！」

俺は後ろに控えていたゴドラドに胸ぐらを捕まれて店長室まで連れ
て来られた！

クソ！今それどころじゃねえーんだよ！

俺の女が食われちまうだろが！！

・
・
・

もう1時間近く説教をされている！

ゴドラドは店内に戻ったが、店長の小言は尽きる事が無い！

俺の我慢も限度を超えた！

「うつせーんだよ！クソオヤジ！！」

俺の拳が店長の左頬にめり込む。

血を吐いて倒れた店長に、2度3度と蹴りを入れ俺様の怒りを思い
知らせる！

本当はまだやり足りないが、それどころではないので、この辺で勘

弁しておいてやった。

慌てて宿屋に向かい、受付のオッサンにヤツの部屋を訪ねたが『そう言っただ事を教える事は出来ない！』と、ナメた事抜かしやがった。2・3発ぶん殴ってやったら、泣きながら喋ってきた。

最初から素直に喋っていれば痛い目をみないで済んだものを……

俺はヤツの部屋の前まで行くと、ドアに耳を当て中の様子を伺う。

ベットの軋む音と共にクラリスの喘ぎ声が聞こえてくる。

ぶっ殺してやるあのヤロー……！！

ドアを蹴破ろうとした瞬間、俺の脇腹に衝撃が走った！

周りを見るとボロボロの店長とゴドラ達数人の黒服に囲まれていた！

気が付いた時は既に翌日の夕方だった。

俺は酒場横のゴミため場に捨てられていた。

ヤツら数人がかりで俺をボコボコにして、ゴミと一緒に捨てやがった！

見渡すとゴミと一緒に自室にあった俺の荷物も捨てられている。

どうやら追い出された様だ……

フン！こんな店こっちから出てってやるよ……！！

だが俺を裏切ったクラリスを許す訳にはいかない！

俺は痛む身体で酒場のステージ奥にある楽屋へ赴きクラリスに詰め寄った。

「おい、クラリス！昨日、あのターバンの男と何やってた！」

「何って……アンタには関係ないでしょ！」

「ふざけんな！お前は俺の女だ！他の男と寝るなんて許さねえ！」

「何で私がアンタなんかの女にならなきゃいけないのよ！アンタの女になるくらいなら、スモールグールに犯された方がマシよ！」

ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！

「このアマ……馬鹿にしゃがって……！」

俺はその場でクラリスを押し倒し、下着同然のステージ衣装を引き

剥がす！

「きゃ~~~~~!!!!!!」

クラリスの身体に馬乗りになり、左手で両腕を押さえ付け、右手でズボンのチャックを下ろそうとした瞬間、俺の脇腹に強烈な蹴りがめり込んだ！！

ゴドラドが駆け付けオレを蹴り上げた！！

「何踊り子を襲ってんだコラ！！昨晚、フクロにされただけじゃ足りないらしいな！」

アバラが折れ、上手く息が出来ない…

数人の黒服が集まり、俺の事を蹴りまくる！

「2度とこの町に入るんじゃない！」

そして俺は黒服の捨てぜりふと共に町の外へ捨てられた。

ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！ちきしょう！必ずぶつ殺してやる！必ずだ！！

<ルラフェン>

俺はルラフェンという入り組んだ造りの町で暮らしている。

行き交う通行人を襲い金品を強奪して暮らしている。

特に狙い目は若い女だ！

襲い、犯し、奪い、殺す。

この町なら隠れる場所も多く、官憲にも掴まりにくい！

今も、5日前に襲った親娘を、隠れ家の一つで犯しているところだ。金はいあんまり持ってなかったが、良い女だったので隠れ家まで持ち帰ってきた。

特に娘を気に入ってしまった。

まだ10歳にも満たないのだが、初恋のビアンカによく似ている娘だ。

だが、その娘も先程からぶち込んでいるのに反応が無い…どうやらくたばった様だ…

俺は娘の死体の中に欲望を注ぎ込むと、手近に置いてあったこん棒で娘の頭を叩き潰す！

その光景を見て悲鳴を上げる母親の頭へもこん棒を叩きつける！

性欲を満足させた俺は、今度は食欲を満足させるべく酒場へ繰り出した。

そこで、ここルラフェンより西にある山の滝の裏にある洞窟に、お宝があるとの情報を得た為、俺は一財産稼ぐ気になっていた。

< 滝の洞窟 >

酒の勢いで直ぐさま町を出てしまったが、何とか山も麓まで来る事が出来た。

山の岩壁をよじ登り、滝の裏側にある洞窟を発見。

そのまま洞窟内を探索する。

暫く洞窟内を探索していると、人の声が聞こえてきた…

「あれ！？誰がいる！」

緊張感の無い声…

振り向くと、紫のターバンを巻いたあの男がこちらへ近付いてくる。

「あら？本当ね？船もなかったし、どうやって来たのかしら？」

しかも、ド偉いベツピンを連れている！

この男は本当に腹が立つ！

「おいおい…ヒョロいニイちゃんは女連れで冒険ごっこかあ？」

俺の女を寝取ったヤローだ！

コイツのせいで俺はヒデー目にあってんだ！

目の前でデメーの女をブチ犯してやる！！

「ここにはお宝があるらしいが、おめえみてーなモヤシには無理だ

ぜ！」

俺の言葉にシカトして通り過ぎようとしたので、ツレの女の尻を撫でてやった。

これから楽しませてやる事への挨拶代わりだ。

「きゃ！」

「ネエちゃん、良いケツしてんな！そんなヒョロいのじゃ無く、俺のぶつといので良くしてやんぜ！」

俺は自分の尻を押さえこちらを振り返る女に手を伸ばす…次の瞬間！俺の左頬へ強烈な衝撃が迸る！！

記憶はそこで終わった。

何が起きたのか判らない…

気が付くと俺は数人の荒くれ者共に囲まれていた。

「おう、気付いたか！こんなモンスターもいない洞窟で誰にやられたんだ！？」

左頬が激しく痛い！

どうやらあのヤローにやられた様だ…

「ム力つくヤローに不意打ちを食らったんだよ！！」

俺の言葉を聞き荒くれ共は盛大に笑ってやがる！

笑い事じゃねえ！ム力つくヤロー共だ！！

「まあ、いい…この洞窟にお宝があると聞いて来たんだが、その不意打ちヤローがかつさらって行った様だ…何もねえ！！」

クソッ！あのヤロー…また俺から奪いやがった！必ず殺してやる！

「俺達はカンダタ一家。おめえ！名前は？これからどうすんだ？俺達と来るか？」

カンダタ一家！？

フン！おもしれえ………

「ああ…俺はジャイ！。俺も仲間に入れてくれ…」

「構わねえ！が一番下っ端だって事を忘れんなよ！」

今は下っ端でいてやる…だが、いずれ盗賊団を奪ってやる！

ジャイー一家に変えてやる！！

<世界の某所>

俺がカンダター一味になってから数ヶ月。

俺には盗賊が肌に合っている様だ。

人生最高に幸せな毎日を送っている。

俺達のやっている事は単純だ。

ルラフェンで俺がやっていた事を大規模にした様なもんだ。

町から町へ渡り歩く行商人を襲い、金品を奪う。

女がいれば持ち帰り、全員で死ぬまで犯す！

中には死んでから犯すヤツもいる。

俺達は同じ土地に長居はしない。

一定期間そこで稼いだら、別の土地へ渡り歩く。

カンダタ親分が海を渡りグランバニア地方へ行くと行ってきた。

何やら仕事を請け負った様だ。

何でも何処その王族を殺すのが仕事らしい…

俺好みの仕事なので率先してやる気を見せる事にする。

<グランバニア地方>

試練の洞窟と呼ばれる洞窟入口で、カンダタ親分と俺達10人は身を潜めてターゲットの到着を待っている。

親分が言うには、洞窟の一番奥で殺しモンスターに死体を食わせる必要があるらしい。

めんどくせー事だ…

暫くすると男が一人で洞窟へ入っていった。

紫のターバンを巻いた男……とても王族に見えない男……アレはあの男だ……！

俺から全てを奪った男だ……！ヤローが王族……？

仕事じゃ無くたってあの男を殺してやる……！！

今日は最高の日になりそうだ……！

俺達はヤローの後を追ひ洞窟の一番奥まで辿り着いた。

「おっと……！ここを立ち去るのは、待ってもらおうか……！」

気の抜けた歌を歌っていた男に親分が怒鳴り付ける。

さすがはカンダタ親分……俺に向けて怒鳴っている訳では無いのにも拘わらず、思わず緊張してしまふ程の声だ。

「何ツスかあ……？」

しかし、ヤローは緊張するどころか間抜けな返事で返してくる。

「あ……？もしかして……アンコール希望ですか……？うん、忙しいので1曲だけなら披露しますけど……」

コイツは王族として生まれ育ち、何一つ苦労することなく育つたに違いない。

我が儘いっぱいに育つたんだ……！

許せねえ……！！

「ちげえ……よ……！あんたにその証を持って帰られると、困る人がいるんだよ……！」

「そう……！然る止ん事無い方からの依頼で、オメーを殺しに来たんだよ……！」

「うるせ……ぞ……！テメーら……！！余計な事言っんじゃね……！」
親分の怒号が飛ぶ。

「あ……の……」

しかし男は緊張感無く話しかける。

「おサルさんがどうしたんですか……？」

「は？」

何言ってんだ？コイツ！？

「イヤ…さっき、サルがどうのって…」

「然る止ん事無い方だ！さるやんことないかた誰も動物のサルの事なんか言ってるねえ！」
「とんでもねえ！馬鹿だ！」

「ああ…で、僕を殺して何になるんですか？」

「オメーが王様になるのを阻みたいんだよ！」

俺は自分の気持ちを思わず吐き出した。

「馬鹿だなあ、君達は…」

馬鹿はテメーだろが！！

「僕の奥さんは妊娠中なんですよ。僕が死んでも、男の子が生まれたら無条件で王様じゃないですか。君達のやっている事は全くの無駄だね！」

「だったら、オメーの嫁さんとガキも一緒に始末すればいいじゃないか！」

そんなとき俺が犯し殺してやるよ！！

「がははは、ちげーねえー！」

俺達は揃って大爆笑をしてやった…が、俺の視界に俺の身体が移り込む。

首から上が無くなり、血を吹き出している俺の身体が……
そして何も見えなくなっただけ………いったい何が………？

哀れな男、心の闇、悲しい結末（後書き）

ごめんなさい、こんな内容で…

お叱りを含め、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0510x/>

ドラゴンクエストV～友と絆と男と女(外伝)

2011年10月9日22時51分発行